



## コロナ禍の企業法務

野村証券株式会社 執行役員 岸田 吉史

野村証券で法務及び海外コンプライアンスの担当役員をしております岸田と申します。ACPFメルマガは第3号となりますが、北田理事長、島岡副理事長に続きまして、巻頭言を寄せる光栄にあずかりました。島岡副理事長が東芝の法務部長をされていたときから、長くお付き合いをさせていただいているご縁によるものです。

本巻頭言を書いております2020年8月下旬現在、新型コロナウイルスの新規感染者は減少傾向を示しつつも、依然高水準の状況で、医療提供状況にも不安の声が出てきています。治療薬、治療候補薬は見つかってきていますが、必ずしも確立されたものでなく、ワクチンの実用化はまだ先とされています。With コロナの継続を前提として、リスク対策を継続し、経済、社会を回していくことが必要となっています。また、感染者への誹謗中傷が大きな問題になっていますが、どんなに対策をとっても感染者は必ず出るということで、感染者を責めないということも重要だと思います。

私は平成4年の野村証券入社来、そのうち約20年を企業法務に従事してきました。今般の新型コロナウイルスの対応で、当然ながら、法務部員の働き方はもちろん、法務部の業務運営について、かつてない大きな、そして急激な変化を強いられることとなりました。法令上可能な限りにおいて例外的対応をとることもありました。長年法的に必要なと思っていたことが実はそうではなかったというものも多くありました。例えば、法務省と経済産業省が共同で株主総会に関するQ&Aを公表し、「会場に株主が出席していなくても、株主総会を開催することは可能」という見解を公表しました。株主総会は会社の広報活動的な要素もあることは否めないものの、法的には会社の最高意思決定機関であり、株主を入れない形での開催が認められるとは思いませんでした。この軸にあるのは、新型コロナウイルスの感染拡大防止という社会的要請だと思います。

社内で見ても、コロナ禍においても法的に必要な手続きを漏れなく進めていく、業務を進めるビジネス部門をしっかりと支援していくというのが法務部門の使命であり、この状況下でも業務継続していくことが重要になります。コロナ禍での危機管理やビジネスの大きな変化の中、

法務部門の重要性はますます高まっていくところ、業務継続と社員の健康と安全を両立させていくことが大切になっています。業務継続の観点からいうと、オンライン会議や会社 PC 環境へのリモートアクセス等、在宅勤務のファシリティを整備することはもちろん、出社しなければならない仕事を減らす必要があります。当初は「うまくいくのか」という懸念があったものの、多くの業務は在宅勤務で回るようになりました。しかし、どうしても出社しなければならないということで残っているのが契約書等への押印業務です。「ハンコを押すために出社しました」という笑い話が現実には起きているのが法務部の現場です。紙の契約書を印刷、製本、押印して、郵便で送る、電子契約なら数分で済むことが、そのやりとりで数週間かかることもあります。契約については相手方もあることなので一足飛びにはいかないのですが、政府主導で書面の電子化推進という後押しもあり、今後さらに在宅勤務の環境が整備されていくことを期待しています。

このコロナ禍、在宅勤務におけるマネジメントの大きな課題としては、コミュニケーションがあります。この問題については語り尽くされているかもしれませんが、正解もないという状況だと思います。私自身、1日何本も電話会議、ビデオ会議を行い、その他電話、メールで必要なやりとりをし、何ら不便は感じていません。しかし一方で、職場に一緒にいて交わされる軽い会話から生まれるアイデアや気づきというのがなくなってしまいました。こうしたコミュニケーションは業務のみならず、メンタル面でも大切であり、コロナ禍においても、それに相応するものを今後確保していくために工夫する必要があると考えています。

昨年(2019年)5月から「ACPF フォーラム」という新企画が立ち上げられました。趣旨としては、「一般的犯罪防止や贈収賄を中心とする企業コンプライアンスに関する国内外、世界的な動向について、分かり易くご紹介するセミナー」で、私はフォーラムに登録し、第1回「日本は中世の刑事司法か？」というセミナーに参加させていただきました。セミナーの内容もさることながら、引き続き行われたセミナー会場での懇親会で、講師の方や異業種の法務担当者の方々と語り合うことができたのは大変貴重な機会でした。しかしながら、まさに「三密」が形成されてしまうことから、現在はこのフォーラムは開催されていない状況です。これに限らず、当たり前だったいろんなことができなくなっていますが、コロナが収束し、このフォーラムでの「顔が見える交流」を自由にできるようになることを願ってやみません。

(了)